

スリランカでの日々の生活は、正直言ってそんなに快適というほどでもない。1年中ほとんど変わらない気候は四季のある日本と比べると、身体に感じる心地よい変化もなく、何かをしようと思っても意欲が起こりにくい。またバラエティの乏しい食べ物も、何を食べてもどこで食べても、みな同じような感じで満足を感じる度合いが非常に少ないと言える。

今回は毎日の生活の中で見たことや感じたことを写真と共に紹介してみたい。以前にも書いたが、私が住んでいる家は2階建て(一部3階建てで、ここには仏陀礼拝室と使用人部屋がある)で、1階には別な家族が住んでいて私は2階に住んでいる。下に住んでいる方たちは若夫婦に子供(まだ1歳少々)とご主人のお母さんで、ご主人はコロンボの病院に勤めている。毎朝7時過ぎには車で出掛けて、帰ってくるのは夜9時近くになることが多く、土曜日も出かけている。スリランカ版猛烈サラリーマンというところか。

奥さんのお母さんも孫の面倒を見るために時々来ることがあり、よく顔を合わせる。彼女は昔研修のために名古屋にあるノリタケ陶器で働いていたことがあり、日本語がかなり出来る。時々孫をあやしなながら「四季の歌」のメロディーを口ずさんでいるのが聞こ

えたりする。一瞬、ここはどこなのか、と思ったりしたことがあった。

6月頃、子供の誕生日にお招き頂いた。親戚や家族の方々を招き、また私も同じ家に住んでいるということで招かれたが、スリランカでは本当に子供を大事にしていることがわかる。誕生日だけでなく、普段から両親の祖父母に守られて大事にされていて、時には過保護のような気もしないではないが・・・。

私が住んでいる家の大家さんは、スニル・カリヤカラワナ(Snil Kariyakarawana)さんといい、南部の出身で、現在はイギリス・ロンドンに住んでいる。ケラニヤ大学出身で、一橋大学と立教大学に留学したこともあり、しばらくケラニヤ大学で教えていたことがあった。

日本での留学体験があるせいか日本に対する関心が強く、日本人に対しても何かと好意を寄せてくれる。彼とは普段メールでやり取りしているが、昨年12月と今年になって8月にスリランカに戻って来て、ここにしばらく滞在した。去年は一人で来たが、今年は家族6人(ご夫妻、子供2人、祖母、親戚の女性)+使用人1人を連れてきて、非常に大変だった。夫妻には4歳になるスダムと言う男の子がいて、とにかく手におえなく、普段はおとなしくしているが、気に入らないことがあると、親をたたいたり、物を投げたりする。時には泣き叫ぶことがある。

私には最初人見知りしてなかなかつかず、10日間ほどは全く見向きもしなかった。しかし、毎日接してきたせいか、その後私のことを「センセイ」と呼ぶようになり、やっと一緒に遊ぶようになった。お別れする時に「センセイと別れたくない。一緒にいたい」と泣きだし、父親が「やっと友達になれたね」となだめながら別れた。ロンドンに戻ってから、彼はしばしばセンセイのことを話していると父親から電話があった。



階下の子供の誕生パーティ

彼らがここにいる時は祖母が食事を作ってくれた。ごく普通のRice and Curryであるが、彼らは南部出身者なので赤米を好むようで何度も赤米が出てきた。その上、肉よりは野菜をたくさん使い、毎日色とりどりの野菜を食べることができた。祖母の料理は素朴で、ごく普通の家庭料理である。一般的にスリランカ人は3食ともご飯を食べる人が多く、その食べる量ときたら日本人の2倍は優に食べている。道理で太っている人が多い訳だ。裕福な人ほど太っている人が多い。

時たま家の管理や修理に泊りがけで来てくれる青年がいて、名前をブッディカ(Buddika)といい、何度か顔を合わせたことがある。しかし、彼は聾啞者で、口がきけない。普段、家主とは手話で話しているが、家主がいない折どうしても伝えたいことがある時など大変難儀した。日本語の手話は少し勉強したことがあるので、それを使って会話を試みたが、やはり全然違うようでコミュニケーションは難しかった。それで書いて意志を伝えることになったが、彼はあまり英語の方は得意ではなさそうで、これまた大変だった。どうにか最後にはお互いの意思を理解することが幾分かできるようになり、私にとってもよい経験となった。

ブッディカはある時写真を見せてくれた。それは彼の結婚式の写真である。今年の8月5日に式を挙げたそうで、幸せそうに写っていて、見ているこちらまでほのぼのとした気持ちにさせられた。「相手はどんな人？」と尋ねると、彼と同じように聾啞者で、毎日の生活はそれなりに大変であるが、周囲の人が助けてくれるので、とても幸せだと語ってくれた。

スニル氏の家にいると、スリランカの普通の家庭で見る人間関係、家族の姿、彼の北部出身者と南部



手に負えないスタム



赤米を使ったライス&カレー

出身者の違い、彼を取り巻く様々な人々の様子など手に取るようにわかり、興味深いものがあった。

スニル氏は弱者に対しては大変思いやりが深く、恐らくそれは仏教に対する信仰からきているのかも知れない。彼は大変熱心な仏教徒で、先に記したように3階に礼拝室があり、そこで毎日夕方家族と共にお経を唱えている。彼とは時折メールでやり取りをしているが、数日前にスニル氏から頼まれたと2人の男性が訪ねてきた。家の中の電気や水道の点検をしてくれて、ちょうど水道の水の出が悪いところがあったのですぐ直してくれて、大いに助かった。

スニル氏の家族はイギリスに戻り、私はスリランカでの任期を終えて日本に戻るが、彼や家族の方たちとはもう会えないと思うと寂しい気がする。また将来いつか会えることを期待したい。



ブッディカの結婚式の写真